

近年におけるリンゴ炭疽病の多発要因と防除対策

【概要】

リンゴ炭疽病の病原菌は 2 種類ありますが、これまでは本県で優占していた *Colletotrichum acutatum* の発生生態に基づき幼果期を重点防除としてきました。一方、近年は病原性の強い *C. gloeosporioides* による被害が優占しているため、本種の発生特徴と近年の多発要因を明らかにしました。

1 *C. gloeosporioides* による炭疽病（図 1）

- (1) 伝染源：園地周辺のニセアカシア等の雑林が伝染源植物となるほか、リンゴ樹の果台でも越冬します。果台では 6 月と 8 月後半～9 月に分生子が形成されます。
- (2) 感染・発病：気温 20℃ 以上の降雨によって分生子の形成・感染量が多くなります。7 月に感染すると、15～30 日程度の潜伏期間を経て、8 月から樹上で発病します。
- (3) 果実の感受性：6～8 月は感受性が高く、9 月になると低下します。

2 近年の多発要因（図 2）

6 月下旬の異常高温（平均気温 20℃ 以上の降水日）と 8 月中旬の多雨が、本種による一次感染と二次感染を助長する要因であると考えられます。

3 今後の防除対策（図 3）

従来種（*C. acutatum*）を対象とした幼果期（落花 10～30 日後）の防除に加えて、本種を対象とした以下の対策を講じて下さい。

- (1) 6 月後半が高温で推移する場合は、本種による秋期の多発を警戒し、入梅期（6 月中下旬～7 月上旬）と 8 月の防除を徹底します。
- (2) 病原菌は雨媒伝染するため、降雨前の予防散布を徹底します。
- (3) 樹上の発病果は重要な伝染源となるため、見つけ次第摘み取り処分します。

【試験データ等】



図 1 *C. gloeosporioides* による炭疽病の病徴（品種：シナノゴールド）

摘要）8～10 月に発生し、病斑は赤道上面に見られる。発生が多い品種：きおう、紅いわて、シナノゴールド、王林、ふじ

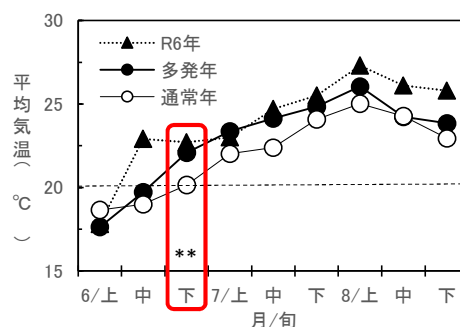


図 2 多発年における気温の推移（県中部）

摘要）多発年は 6 月下旬の気温が有意に高く、本種の感染好適（20℃ 以上）を満たす。R 6 年は 6 月中下旬が高温であり多発したと推定。

今後の防除対策（6 月後半高温時）

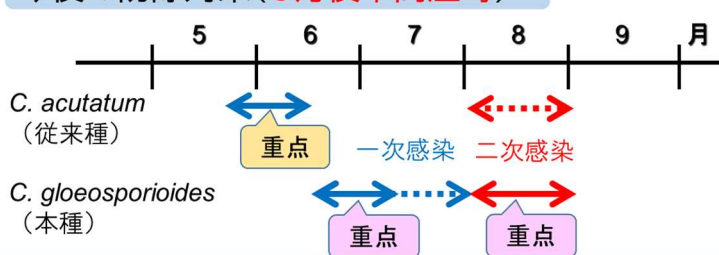


図 3 今後の防除対策（模式図）

点線矢印：感染時期

線矢印：重点防除時期

摘要）6 月後半が高温で推移する場合は、本種による炭疽病の多発を警戒し、入梅期と 8 月の防除を徹底。

【令和 6 年度成果】近年におけるリンゴ炭疽病の多発要因と防除対策（R6-指-14）